

---

# 夢見合い

湖真子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢見合い

### 【Nコード】

N0576L

### 【作者名】

湖真子

### 【あらすじ】

私は18歳の誕生日から正体不明の黒い霧の様なものに何度も何度も何度も追いかけられる夢を見続けていたの！正しくストーリーカー！安眠妨害反対！！！！

しかし、それは母からのプレゼントだって言うのよ？

有りえないから！！！！何なのよそれは！！！！

……元気なヒロインのお話です。

ぶろろーぐ？（前書き）

ようこそ夢の中へ

ホラーでもシリアスでもありません。

ぶるるーぐ？

闇。

闇。

暗闇。

暗闇が占める世界。

暗い闇の中。

まるで、月夜のない夜のよう。

上も下も横も暗闇に包まれている。

あるのは地面。

凹凸は無い。

全て平。

坂もない。

壁もない。

とても広い空間。

風もなく。

暖かさもなく。

寒さもなく。

そんな世界で少女が走ってる。

必死に走ってる。

その少女は後を気にしている。

何かに追いかけられているのだろうか？？

ただ、ひたすらに少女は走り続ける。

少女は知っているのだろうか？

この世界の意味を。

この世界は少女への贈り物だと言つ事に……。

ぶろろーぐ？（後書き）

はた迷惑な贈り物。

主人公が少女なので頑張ります・・・。

## 夢の中

「はぁ・・・はぁ・・・」

真つ暗な闇の中、私の呼吸と足音が響く。

たつたつたつたつたつた・・・

逃げなくちゃ・・・！！！！！！

アレから逃げなくちゃ。

きつとアレは・・・

必死に走る私。

ええ、必死に。

後ろから、黒く靄がかつた霧のようなものが追いかけてくるんだもん。

つーか何故、追いかけてられるのよ???

『ぞわわあああ〜』

闇が動く。

ぎゃああ！！！！

背筋がぞくつてした！

あんなものに捕まって堪るかああ！！！！

ぶつちやけ、何に追われてるかなんて分からないわよ？

この世界、真つ暗なもの！！

見えないけど、気配と微妙に蠢いている部分でかろうじて分かるって感じ。

なら逃げなくてもいいだろう??つて??

でもね、私の本能が逃げると訴えるのよ！！！！

ファイトー！！！！私！

この書との追いかけては15回目(覚えてる限りでは)だった  
りする。



それを考えると不思議だらけ。

「着替えるかな・・・」

私は着替え始めた。

そう言えば、自己紹介まだだったよね？

えーと名前は相田美緒<sup>あいたみお</sup>。初めまして。

肩に届くチヨコレートの様な色をした天然のウェーブがかっている髪が特徴的よ。

目はクリツとした二重。うん、アイプチ使わなくて済むからラッキ

ー。一応、可愛い顔立ちに入るのかな？

綺麗形じゃないのは確かだけど（泣）

肌が白いからピンク色の服を着る事が多いかな。

実際に、今着ているパジャマもピンク色だしね！

最近18歳になったばかりの女子高校生！

受験だろう？って、そこは黙ってて！！

紺色の制服に着替えた私。

さてと、学校に行きますか！！！！

勿論、朝ごはんを食べてからね。

\*\*\*\*\*

そこら辺にある普通の学校。

私の家から一番近い学校で、徒歩で通える距離にある。勉強も運動もそこそこ。特徴があるといえば桜。

校門近くの枝垂れ桜の木が開校前からあるらしく、見事な大木。

その後を続くように桜の木が、校門から昇降口に向かって木々が立ち並ぶ。

しかも両側！！！！

春はピンク色の桜の花のトンネルが出来るの！！  
すつごく綺麗。

高校生になつたら絶対通つてやるって決意したの。

入学式は本当に泣きそうになった。

だって、念願の桜トンネルよ？！

幸せ。

しかもこの学校。

校舎の裏は八重桜もあるの！！

その所為か、学校名よりも「桜の木が凄い高校」と有名で、一層の事「桜高校」と改名した方が良いんじゃないかと思う。

実際、一部の人々から「桜高やなぎたか」と呼ばれてたりするしね。

「おっはよ〜！」

「おはよう」

学校に着くと美緒に笑顔で挨拶する友達。

腰まである黒い髪をポニーテール。真っ直ぐで羨ましい……。

名前は金村真紗子かねむらまゆこ。

紺色のブレザーと赤いリボンの制服が良く似合う大人っぽい子。

「あら〜。今日も良く眠れなかった様子ね。眉間にシワ」

真紗子には夢の事を話してるの。

私ってば「また夢が！！！！」って、思うと不機嫌になる。

「・・・真紗子？」

真紗子は私の眉間をぐりぐりと指で押す。  
痛いから!!!

「いい顔 きつと明日にでも眉間のしわ固定確実ね」

「嫌よ!!!」

「ほほほほほ。素敵よ」

私の反応が大好きらしく、朝から弄る。

「絶対アンタS！チョーが付くくらいS!!」

「ほほほほほ。心地よい響きだわ」

「うう〜!!」

「はいはい・・・。唸らない、唸らない」

唸る私の頭を撫でる真紗子。

「・・・また、同じ夢なの？」

「うん・・・黒いモヤモヤに追いかけられる夢」

「ストーリーかしら？愛されてるわね」

「・・・真紗子？」

「ほほほほ。冗談よ・・・一度逃げるの止めて戦ってみれば？少

しは夢が変化するんじゃない？」

どうせアンタの事だから同じ事（同じこと）しかしてないんでしょ？つと。

その通り。

「・・・」

何か目から鱗ってこついうときに使うの??

ハツとしたよ。

今まで私は逃げるだけだった。

黒い靄に「追いかけてくるな!!」と怒鳴る事すらしてない。

しかし夢。

されど夢。

夢の登場物と戦つと言つのも可笑しな話。だが、これ以上同じ夢が  
続くのは苦痛。

やらないよりはやってみよう!!!

「やってみる！！！！」

打倒黒い霧！！！！

手に入れるぞ！安らかな夢！！！！

「・・・だからって、今から寝ようとしちゃ駄目よっ。」

「うっ」

何で分かったの？

## 現実2

真つ暗な闇の世界。

この世界には地面がある。

・・・夢だ。

私はこれは夢だと理解した。

毎日見ているから直ぐに分かる。

闇の世界に立つていると前方から嫌な気配が・・・！！！！

それは、いつも私を追いかけてくるモノ。

闇の中の世界とは別の黒い闇。

闇の世界だからこそ、良く分からないのかもしれない。

光が差したら分かるかもしれない。

蠢く黒。

蠢くモノ。

はつきりした形は分からないが、分かることがある。

生理的に嫌いであると言う事。

黒い靄は世界が闇なのを利用して同化しようとする。

闇に紛れ込む。

確かに、実際に見えない。

けど、分かる。

嫌いだからこそ、悪寒がする。

嫌いだから気配で分かる。

「・・・また、出たわね！！！！」

今日の私は違うのよ！！

美緒は黒い靄に向かって指をさす。

「迷惑よ！！！！何度も何度も・・・姿もはつきりさせないで、ひたすら追いかけてくるなんて・・・」

安眠妨害よ!!!

「っーか追いかけてこないでよ!!!」

初めて、黒い靄に言った。

偉い私。

その瞬間、闇の世界に光が現れた。

徐々にはなく一気に。

「っ!!」

今まで闇だったため、目がなれない私は目をつぶる。

眩しい!!!

行き成りかい!!!

「.....」

しばらくして、私は目を開けた。

暗闇から明るい世界へ。

世界は明るくなった。

明るくなったからこそ分かる。

私の前に立つ黒い靄だった正体が明らかになった。

それを見たたん、顔が青くなった。

「いやあああああああああああ!!!!!!!!!」

私はは悲鳴をあげた。

\*\*\*\*\*

「いやああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

私は大声を出した。

学校中に響いたかもしれない。

それほどの大声だった。

その声に、周りはぎよつとした顔を向ける。

だけど、それに気付く余裕もない私。

授業中に突然の悲鳴。

何事か?!と、周りは驚いた。

「……大丈夫か??」

「……教室?……伊藤先生?????」

私に声をかけたのは学校の先生。

見覚えのある眼鏡顔に黄土色のベスト。担任の先生である。

私は辺りをきよるきよるとする。

えつとえつと……。

木で出来た机。

書き途中のノートに国語の教科書と筆記用具。

目の前に立っているのは担任の伊藤先生。

伊藤先生の背後に見えるのは黒板。

左側は窓とベランダ。

右側に見覚えのある顔達。クラスメイト。

ここは教室……??

机をペタペタ触る。

……感触がある。

私は、自分の頬つぺたをつねってみた。

ぎゅっ

……痛い。

「……現実……」

私は夢から覚めたことを理解した。

「……伊藤先生!!!!」

先生の手を両手で握りながらお願いした。

「お願いです！もし寝そうになつてたら殴るなりして起して  
ください！！寝たくありません！！うえ〜ん！！」

あんなもの二度と見たくないよおおお！！！！

もうやだああああああ！！！！！！

私は泣いた。

その様子に誰もが同情した。

余程恐ろしい夢を見たんだな・・・と。

「その・・・泣くな??？」

オロオロしつつ慰めようとする先生。

「ううっ・・・」

「・・・金村・・・頼む」

どう頑張つても泣き止まない生徒<sup>わたし</sup>。

どうしたらいいか分からない先生は真紗子に頼んだ。

確か仲が良かったよな？つと、言う顔。

「分かりました。・・・みーお。美緒ちゃん？」

先生に頼まれた事により、やりたい放題だわ〜と、思っていること  
は顔に出さない。

「うえ〜ん」

「先生。保健室行つて来ます」

「宜しく・・・頼む」

## 現実2（後書き）

授業中断。

パニック泣きといったところでしようか？

悲しくない泣きの姿は表現しにくいですね・・・。

### 現実3（前書き）

その後。

場所を移動してます。

### 現実3

青々とした空に光り輝く太陽。学校の中で一番空に近い場所に私達は居た。

保健室のはずでは？と、思った人！

私も思った！！

真紗子曰く「隣でメソメソ泣いてる人がいんのにジメツとした保健室？やあね〜更に湿っちゃうわあ〜。・・・それ以前に病気で寝込んでる人間の公害めいわくでしかないわよ〜」との事。

真紗子に引つ張られながら着いた場所は西棟の屋上。きちんと整備されているため、誰でも出入りが自由。ベンチと自動販売機が設置してある。

「どんな夢だったの？お姉さんに言ってみな？」

真紗子を買ってくれた缶ジュースを受け取る。

その頃には私はだいぶ落ち着いて泣き叫ぶ事はなくなっていた。

「・・・楽しんでるでしょう？」

「ほほほほほほ！」

当たり前でしょ？と、言う顔で笑う真紗子。

その姿が真紗子らしくってホツとする。

ココは夢の中じゃ無い。

「あのね・・・」

夢の中で私は

「つーか追いかけてこないでよ！！！」

と言った。その瞬間、真っ黒だった闇の世界に光が表れた。今まで正体不明に追いかけられていた黒い霧。正体が明らかになった。

巨大の鳥のような姿をしたもの。

へドロのような深い緑色。翼は大きく全長は2メートル。それだけなら良かった。

その鳥もどきは体中に目が付いていた。

顔に7つの目。肩、翼にもぎっしりと目が付いている。その目が私を見る。

・・・怖かった。

「・・・ホラー？どっかに出てきそうな妖怪ね」

「思い出すだけでもう・・・うっう・・・」

何で楽しそうなのよ!!!

そだった・・・真紗子はお化け屋敷が大好きだった・・・。嫌だと騒ぐ私を無理やりお化け屋敷に連れて行くのよね・・・。怯える人がいないとつまらないからだって。

「ほほほほ！目がぎっしりね！見て見たいかも？」

真紗子なら指差して大笑いしそう・・・。

「その目達がぎよるぎよるっと私を見るんだよ？・・・もうやだあ」

真紗子があたしの頭を撫でる。

「・・・なんか悪さした？・・・て、美緒がするわけ無いわよね」

「何で？心当たりは無いけど」

「後ろめたい事があったり、人に見られたら不味いこととしてそんな人って、お前の行いはすべて見てるんだぞ、的な夢を見そうじゃない？」

「・・・」

そんな感じじゃない・・・。

あの目は気持ち悪かった。

痴漢とか変質者が見るようなゾツとする目線。

性的欲望も感じられて・・・凄く嫌。

思わず自分の腕を握る。

もうやだあああ！…！！

あんなもの二度とみたくなあ  
いいいいいいいい！！…！！

### 現実3（後書き）

あれ？

いつのまにか泣き止んでる！。

パニック泣きだからそんなものですよ（汗）

## 現実 4

寝るのが嫌！

寝るのが嫌で仕方が無い私。

それでも夜はやって来る。

学校から帰って夕飯を食べた。お風呂にも入って……後は寝るだけ。

いつもは寝てる時間だけど……

寝たくない〜！

でも眠い……。

「う〜」

リビングでテレビを見つつ唸る私。

小さめのテーブルの足は花の模様が彫られていて、それと対の二人用の大きさの木で出来たソファの足には蝶の模様が彫られている。テレビ用の台は木の曲線が綺麗。リビングの家具は全てアンティークの形で私のお気に入り。そのソファに花柄のクッションを胸に抱きかかえて私は座っている。

「美緒ちゃん。もう11時よ？寝ないのお〜？」

メルヘンチックな母。本日の格好は赤のワンピースに白いレースで出来たエプロン。頭には大きめな赤いリボン。赤みがかった茶色い髪はふわふわウェーブの髪。

長い睫毛。目はパッチリしていて、愛らしい顔。まるで姫様のように。ただ、姫様と違うのは右手に持っているのがフライ返しだと言うところ。

この姿で母は家事をするのだ。

「……寝ない」

「美緒ちゃん？」

だつて寝ると目玉が……！！！！

嫌々と私は首を左右に振る。

「もう！わがままな美緒ちゃん……」  
そう言つて母は、虫も殺さないような顔で私の首筋に容赦ない一撃を喰らわせた。

手刀！！！！

「っ！！」

なんちゆうことすんのよおおお！！！！！！

何気に手馴れた感じがするのは気のせい???

見事急所にヒットした私。

その一撃では夢の中へ。

気絶とも言つ……。。。

「寝なくちゃ始まらないのに……」

母の呟きは私の耳に入ることなく……ブラックアウト

現実4（後書き）

母ちゃん登場!!!

## 現実5

何処までも白い白い空間。

見覚えのある光景。

ああ・・・夢ね。

この世界が夢だと私は気付く。

何度も見てるしね〜嫌だけど!!

何にも無い空間!

・・・そう言えば寝たくないから頑張って起きようとしてなかった?  
た?

えっと・・・何で私ココに居るの?

いつ寝たのよ私?

「・・・あつ!」

しばらく考えて・・・思い出した。

気絶したからよ!!!

相変わらず母のやる事はぶっ飛んでる!と、思うのは私だけ??

・・・毎度の事で怒鳴る気さえ起きない。

「母だから何でも有」それが我が家の家訓の一つ(笑)

「えーと・・・」

とりあえず見渡す。

うん、見覚えのある何も無い世界。

少しも変わったところが無い!

毎度お馴染みの夢。

思わず夢の中でガツクリと肩を落とす。

違う夢なら良かったのに・・・。

現実も夢も甘くありません!って感じよね・・・。

どうやら前回の続きのようで当たりは明るい。

・・・今更暗くなっても見ちゃったモノは取り消せないしね・・・

むしろ暗くなくて良かったと言っべきかな???

ココで暗かったらお化け屋敷よねー

・・・屋敷じゃないから空間？夢？

どうでも良い事をひたすら考えて現実逃避。

早く起きて私ー！ー！ー！ー！！！！

しばらくすると・・・

「いやあああああああああああああ！！！！！！！！！！」  
現れたよ！！！！

前回の鳥もどき！！！！

と・・・象もどき！！！！

一匹増えてるうううううううううう！！！！

しかもその像もどき黄色い！蛍光色の黄色！！！！

何なのよおおおおおお！！！！

黄色の象のよう。150センチ位の小柄。耳が大量に付いている。

左右の耳が八重桜のフリルのようにわんさかと付いてます・・・。

もうね、戦うなんて無理。

ひたすら走ってます私。

前回のようひたすらダッシュ！！！！

頑張れ私！

あれよね・・・私の感って言うか本能って凄いよね！

正体知らなくて逃げてたんだよね・・・ははは流石。

今回は象もどきがいる所為か嫌な感じはしないんだよね。

でも、視界に入れたくないのよ！

鳥もどきは2度目だから慣れるって？

見た目がグロすぎるから無理！！！！

今回も目覚めるまでひたすら追いかけてこしました。

現実世界なら確実にダイエット成功してそうじゃない？



## 現実5（後書き）

恐怖と言うよりも生理的に嫌なものは視界に入れたくない〜てな感じ。  
じで。

微妙に美緒ちゃんなれてきた様子（笑）  
きつとそのうちいい事があるさよ！！



タオルが掛けられてたけど」

昨夜、お風呂上りに肩にかけていたバスタオルが……。

何故、それなのよ？

湿ってるのに……。

母曰く、「私が美緒ちゃんを二階のお部屋まで運ぶの？酷いわ」との事。

…小柄な母が18歳わたしの娘を運ぶのは誰が考えたって不可能だって分かるわよ！

きつと母の頭に「毛布」や「掛け布団」は頭になかったんだろうね

……。

…何で昨日の夜に限って、父は出張で家に居なかったのよ!!!  
ぶっ飛んだ母のフロア&ストッパー役が父なのよ。

父が居ないと…被害拡大。

特に私が!!!

授業参観日といい…。

親子遠足といい……。あっそれちゃった。

『ぶっ！気絶させられた状態で放置されてたわけ？あはははは!!』

『！』

被害にあっている私は笑い事では済まされないのよ?!

お蔭で体中は痛いし風邪ひくし……。最悪よ？

『分かった。お大事に〜』

電話終了。

「……………」

通話を終えた携帯を見つめる私。

……………どうしよう。

……………寝たくないよ！

体調が悪いのに……………苦手なアレを見に行くの??

…行きたくないのにお化け屋敷に連れて行かれる気分。

こっという時、泣きっ面に蜂、って言うんだっけ？



## 現実6（後書き）

… 久々ですみません。

久しぶりにパソコンが正常に動きます！ラッキーです。

暑くなると雷や熱でパソコンがフリーズする時期は厄介ですね。

もしかしたら次回の更新は涼しくなってからになるかもしれません。  
すみません。

パソコン頑張れ！。

## 現実7

音も無い、形も無い、白い空間。

何も無い世界が目の前に広がっている。

…いつも夢で見ている光景。

寝ちゃったのか私いっつ！！！！

「ああああ………」

自分が寝ている事に気が付くと、頭を両手で抱えて落ち込んだ。しかも自分でもビックリするぐらいの低い声が出た。その体制のまましゃがみこむ。

「………」

もう少し根性出そうよ私…。

熱があるのに母と格闘していた所為で更に熱が上がったためによるダウン。

ダウン…。

ココは意地でも寝るんじゃないわよ私！！  
起きてよ私！！！！

って、思ったところで起きれるほど器用じゃない私。ここ最近、寝るたびに起きろコールをしているけど起きた事が一度もない。

「……寝ている間に薬使われてないといいなあ………」

恥ずかしさがあるお年頃に座薬は止めて欲しい……。いや、幾つになっても座薬は嫌。

しかし母。

されど母。

「………」

…考えても仕方が無いよね？

両手を頭に乗せてうずくまっていた私は首を左右に振ってから立ち上

がった。

考えない、考えない、か・ん・が・え・な・い！！

「よし！」

座薬と母の事は無理やり頭の隅にやり、私は辺りを見渡した。

いつもの夢って事は変な動物が出てくる可能性が100パーセントなのよね……。

目玉沢山の鳥もどきとか、耳が沢山の象もどきとか：たまにはサボって出てこない日があってもいいと思うんだけど。そんな素晴らしい日があつたら心のそこから喜んで踊っちゃうんだけど！

そんな事を思いつつ指をさしながら確認。

「前良し！右良し！左良し！後……あ」

後ろを向くと1匹の動物が立っていた。じつと、真ん丸の大きくてつぶらな瞳が私を見つめていた。

やっぱり今日も居るんだ…。

ああ…泣きたい。夢の中で泣けるかはわかんないけど。

既に色々私ツカレテマス！！…そんな主張は通じないんでしょうねー。

…っーか、私がつづくまっっている間からそこに居たわけ？

気が付かなかったわよ！

私の後に居たのは猿だったの。鳥もどきや、像もどきでも無い。

見たことが無い猿が5メートル位離れた所に立っていたの。日本

猿って言うよりも外国に生息してそうな猿。チンパンジーとかゴリ

ラを想像すれば分かる？毛深い感じ。だけど、色彩だけがありえない！

だって、トマトのように真っ赤なのよ！！…夢の中の動物もどき

は目に優しくないと思う！色が凄いんだもの。

でも今回は小柄。大きさは犬で言うところチワワくらい。

今まで見た中ではマシかな。色が濃いだけで気持ち悪さは無いから。



「いやああああ!!!!!!」

嫌だ! 離して!!!!!!

そう思った瞬間、何か曲がった。視界が、空間が、猿が……歪んだ。

まるで柔らかくなった飴の様にグニャグニャと曲がる。

そして、世界は再び真っ暗な世界に変わった。

闇。

暗闇。

私はどうなったの?

視界は闇に包まれ、猿の気配は無くなり、足首の?まれている感覚も消えた。

\*\*\*\*\*

「ん……?」

目が覚めた私。視界に入るのはレンガの壁に長方形の黒いパネル。そのパネルはまるで窓の様な大きさ。天井は星の形をした蛍光灯が幾つも吊るされていて、辺りはとても明るかった。見覚えの無い家具。

…ここはどこ???

私の部屋にはレンガの壁とか黒いパネルとか星の形をした蛍光灯は無い。

私の部屋だけでなく、家にこのような部屋は無い。室内にレンガの壁はまず無い。

私は首を横に曲げ、横を見ると絹のように輝く銀色の糸の束が見えた。

それは滑らかで触りたくなるほどの美しさ。その糸の流れを目で追うと白い肌と閉じられた長い睫毛が見えた。

「…え？」

どうやら糸だと思ったものは髪の毛だったみたい…で、顔があったの。私の肩の位置に…！！

近い！！ 近いー！！

見たことも無い、とてつもなく整った顔が私が寝ているベッドに頭と肩が乗っかっているの…！！

彼氏いない歴、歳の数。つまり、男性に免疫の無い私がこんな近くに男性の顔があることは非常に驚く事で…。

「うぎゃあ！！」

ビックリした私は、整った顔から無意識に距離を置こうとして失敗した。

距離を置こうとして、整った顔があった反対側は壁だったらしく思いつき後頭部を強打したの…！！

ゴンッ！！！！

「くううう…」

壁はレンガだったのでとても痛かった…！！

## 現実7（後書き）

すみません。お待たせしました！

## 現実 8

私の悲鳴と後頭部をぶつけた音で恐ろしいくらいに整った顔立ちの人は目を覚ました。

「！」

やや水色っぽい銀色の髪。キラキラ光り輝く腰まである長い髪は肩辺りで軽く紐の様なもので結ばれている。鼻は高く、羨ましくなる程のきめの細かい白い肌。長い睫毛。人形のような整った顔立ちは少なくとも日本人っぽい顔立ちじゃない。絵画に描かれている天使もしくは神様のよう。瞳は空よりも澄んだ碧色。歳は20代後半と思われる青年。無駄な贅肉が無い整った体。水色のワイシャツの上に白衣を羽織っついてい、胸元には青いペンダントを提げていた。

まさに完璧の美よ！！！！ 生きた芸術品が目の前に存在してイマス！！！！

男の人で綺麗って言う単語がぴったりな人って初めて見たー！！！！  
綺麗すぎるううう！！！！

ぶつけた頭を押さえつつ、私は見惚れていた。

その綺麗な人は私を見ると驚いた顔をして慌てて起き上がった。そして、私に話しかけた。

「 Did you get up? Wonderful so  
und was heard a short while ago,  
but are you unhurt? 」

と…。

その声は想像以上の心地よい声で、聞き惚れる声と言つのはじついう声なんだと初めて知った。高すぎず、低すぎず。柔らかい声。

けど。

何て喋ったか分からないわよ!!!

日本人離れした顔だもん。何となく想像できたけど!!! これで関西弁とか喋ったらある意味おいしいかもしれないけど!!!

どうせなら日本語で喋ってよー!!!

聞き取れたのは‘アップ’と言う単語のみ。

……多分、英語よね？

「……」

どうしよう。

私は英語がダメなのよ!!!

英語なんて無ければ良いのに！ と、思うほど。毎回、英語のテストの結果は2桁にいく事が少ない。

……馬鹿だって？ 英語だけよ!!! ……多分。

因みに夏休みは毎年スペシャルな英語の補習で潰れる。中学校の先生からは「高校に受かったのは奇跡だな」と言われるぐらい。友達からは「姫ママの腹の中にも落としてきちやったのかしら？」と言われる……。

私にとって英語は暗号にしか聞こえない……。自分で言っただけ悲しくなるわね……。

兎に角、英語がダメな私の前に英語で話しかける人が現れたの!!!

嫌あああー!!!

何の試験よおおー!!!

「……？」

私が何も答えない所為か、恐ろしいほどの美人さんの顔が不安げな顔に変わっていったの。

でも、どうすればいいのよ？ 何を言ったのか分からないし。何を喋ったら良いのかも分からないんだもの!!!

……あつ！ 壊滅的な英語力を持つ私に皆が口を揃えて教えられた言葉があつた!!!

先生にも友達にも後輩にも何度も言われた言葉！

えーと確か……

「あいきやあんノオおースピークいんぐリツシュ〜!!」  
発音がハチャメチャだった?

だから壊滅的だって言ったでしょ!!

お願い! これを通じて!!

祈る私。

「……………」

しかし、私の言葉を聞いた美人さんは一瞬だけ眉間にシワが入っただけだったの。

…………… やっぱリダメ?

そう思つてると、美人さんは自分の首に下げていたペンダントを首から外した。親指の第一関節位の大きさの水晶のような青々とした石が茶色い紐に付いているだけと言うシンプルなもの。

「 I give it to you 」

今度は単語を切る様な感じでゆっくりと発音しながら私の目を見る。どうやら私の壊滅な英語力が理解されたみたい。でも、それでも分からないものは分からない。

「え?」

美人さんは私の掌にペンダントを乗せた。

…………… くれたのかな?

‘ギブ’って確か‘与える’とか言う意味だっ… ような覚えが… あるし…? ‘ギブ&テイク’とか‘ギブ ミー’とかで使うギブだよねえ…………? 自信は残念ながらないけど。

私の手に渡ったその石は石自体が熱を持ったかの様に暖かかったの。何でだろう?

「 Excuse me . Can I touch you ? 」

「

石に気をとられていると、美人さんは私に近づいていた。そして、

‘チュツ’と言う音と生暖かいものが私の右耳に触れた。

「っ!!!! ななななっ何?!」

もしかして耳にキスした？！  
えええええ？

ビツクリする私。しかし美人さんはそんな事を気にも留めず、  
「私の言葉が分かりますか？」  
そのまま、私の右の耳元で囁いた。

「っ！！！！！」

美人さんの言葉は私の知る日本語で喋っていた！  
ななななっ何で???

日本語??!!

先程まで英語を喋ってたのに日本語？ どういうこと???

「そちらの耳も Can I touch you？」

美人さんが右耳から左耳へ移動すると言葉が日本語から英語に変わった。

「えええええ?!」

もしかして、美人さんが耳にキスしたことによって映画の吹き替え  
みたいになっている？

今の私の右耳は日本語を聞き、左耳は英語を聞いている状態。  
頭が変になりそう……。

「……………」

固まった私を見て、困った顔をして聞く。

「…………… 反対側の耳は止めた方がいいですか？」

こちら側はやってしまいましたけど……と、小声で呟く。

「……………」

何でキスだけで自動翻訳されているのかは分からないけど……。

壊滅的な英語力の私には素晴らしい事です！

自力で今すぐ美人さんえいこの言葉を理解するなんて無理だもの!!!!

「…キスしますか？」

「っ！！！！！」

改めて聞かれたことにより、耳とはいえキスされることを意識した

私!!!

恥ずかしいよおお!!!

あの綺麗な顔が近づくんではよ?

先程みたいに分からない状態でされるのは全然違う!!!  
だけど!

左右違う言葉が同時に聞こえるのは頭が変になりそうだし!!

「...おっ...お願いシマスッ!!!」

今日、生まれて初めてキスのおねだりをしました。

## 現実8（後書き）

…私も英語が苦手です…。翻訳機を使わせていただきましたが…自信がありません！

## 現実9

ドキドキドキドキ…。

私の心臓の音が高鳴る。

自分でも分かる程顔が熱い。きっと顔が真っ赤になっているはず!!  
ぎゃあー! 恥ずかし過ぎる!!

口を開けたら雄叫びを上げてるに違いない!

…落ち着くよ私!!

考えちゃダメ! 考えちゃ。無心、無心、無心…。

一度、深呼吸をしてから私はじっとした。すると美人さんは「クス  
ッ…」と、笑った。

私の緊張ぶりに呆れたのかな?

そう思っていると、私の左頬にかかっている髪に手が当たる。そし  
て、ゆっくりと顔が近づいてきた。

うっきゃああー!!!

顔が顔がああ!!

美人さんのアップに堪えきれなくなった私は目を閉じた。

「A c u t e p e r s o n …」

ちゅっ

私の耳に暖かく、柔らかな感触が触れた。

ひゃああ!!!

「クスクス…。言葉が分かりますか?」

そのまま耳元で囁かれる。すると、

「あああああああー!!!」

どこからか叫び声が聞こえた。

え????

「襲つてんじゃねーよ!!! 俺に対する嫌がらせか?!」  
私と美人さんの間を割って入ってきた。

「離れるよ! レイオ!」  
「っ!!!」

真っ赤な色。ゆらゆら揺れる毛。  
見覚えのある形。小さな体。

それは夢の中で出てきた真赤な毛をした猿!!!  
再び? まれるの?

怖い。嫌だ!  
「いやあああああっ!!!」

ごっつ!!!  
私は猿から離れようとして再び壁に後頭部を強打。  
同じ所を2度もぶつけた私。  
痛い…痛すぎる!!!

「大丈夫ですか?」  
「すげー音だな…平気か?」  
「ううう…」

唸りつつも、痛さを堪えて猿との距離を開けようと動く私。その動きに気付いた美人さんが、ひょいと猿の首根っこを掴むと私の居るベッドから離れた位置にある黒い壁の方へぶん投げた。  
勢い良く猿が飛ぶ。

「うおっ!!! 何すんだよ!!!」  
猿は壁にぶつかる手前で無事に着地。

「怯えているみたいなんですが? 何をしたんですか?」  
美人さんはベッドから離れると猿に聞く。

「え？ 何で？」

「それは私が聞いてるんですけど？」

「うーん」

一生懸命考える猿。

「……」

私は美人さんの行動に驚いたけど、お蔭で落ち着いた。

そっか……。そうだよ。夢で出てきた猿にソックリだからって怯える事無いよね？

夢の中の出来事なんだし。現実と関係ないんだし！

うん。失礼よね私。

そう、冷静になると壁の前に居る猿が喋っている事に今更ながら気が付いた。

見かけに反して、低い声。

……え???

……猿って喋る動物だっけ？

喋るのはオウムとか……主に鳥よね？

見たこと無い種類の猿だしそんなものなの？

……いや、居たらきつとテレビとかに出てて、有名なはずよね？

美人さんとは知り合いらしく、普通に会話をしている。

「……」

うーん。存在してるものを否定しても仕方が無いよね？ 目の前にいるんだし。

そう、私の中で結論付けた。

呆れた顔の美人さん。

「……分からないなら良いです。とりあえず、ドローは部屋から出なさい」

「この部屋だけで良いのか？」

「この家の持ち主に『出ていけ』まで言いませんよ。それに、まだ

本調子までいつてないんでしょう?」

「ああ……」

私が考え事をしている間に猿が私の所為で部屋から出ようとする。

「ちよつと待つて!」

今、出て行かれたら罪悪感を感じるので止めてください!!

夢の猿とソックリだからっていう理由で勝手に怯えたあげくに部屋から追い出すつて……酷いにも程があるわよね? ここは何としても止めなくちゃ!

「「?」」

「あの……怯えてごめんなさい!! 出て行かないで!……えーと……」

夢に出てきた猿にソックリだったから……」

後半は小声になる。

我ながらどうなのよそれ? て、言いたくなる内容よね。夢と現実を……ちやにしているんだもの!

夢は夢。現実 is 現実!

そう、自分自身に言い聞かせてたところに猿の一言。

「え? 夢? ……ああ。それ俺だけど?」

「はああああ???」

夢の中に出てきた猿が目の前に居る猿?

えええ?

「……行き成り有り得ない位に手が伸びて……私の足を掴んだ猿が……?」

「どう聞いても変質者のようですね?」

「あーえー……その……。悪い。驚いたか?」

「その夢の中の猿と一緒?」

「ああ。一緒だ」

ええええ???

どう言う事よ?

「夢の中の出来事なの???」

「夢だけど現実でもあるんだよ」

と、猿の言葉に美人さんが納得をする。

「…ああ、‘夢繋ぎ’を使用したのですね？」  
意味わかんないわよ!!!

何なのよ!!! その‘夢繋ぎ’って？

「何それ？」

色々の意味がわからな過ぎるんだけど!!!

説明お願いします!!!

## 現実9（後書き）

やっと次回は説明に入ります。

…美緒ちゃんの性格的に脱線しそうな予感が…。

## 現実10

遠くの人と一瞬で結ぶ電話は大変凄い文明。最近では更に進化してテレビ電話という物がある。異国の人がろうが一瞬で結び、しかも顔を見て話す事が出来る。

それでも実際に会いたいと思う人は居る。大切な家族とか恋しい人とか。

「そう言う事で作られたのが‘夢つなぎ’と、言われる物です」

「夢つなぎ？」

「名の通り、人の夢と夢を繋ぎます。お互いに同じ夢を共有しますので、夢の中の出来事です。…ある意味、現実でもあります。直接会う事と変わらないので便利ですが色々と条件もあります」

‘夢の中でもいいから愛しい人に会いたい’とそれをヒントに作られた。

夢の中ならば時間や場所なんて関係ない。

「…最近だと盗聴とか出来無いから内密の会議とかに使われる事が多いけどな。…それを使って俺達は会ったんだよ」

「…うそ…？」

そんな技術聞いたこと無いわよ！！

ぶっちゃけ胡散臭い！

「俺は夢での出来事を全て言えるぜ？ アンタ、初め頭を抱えてしやがみこんでいただろう？」

猿が自信満々に語る内容。

っ！ してた。確かにしてたわよ。

「……」

じゃあ、本当に…？

その「夢つなぎ」と言うものを使って私と猿は夢の中で出会ったの  
…？  
けど…。だ・け・どっ…！！  
「…何でそれを使って、会う必要があるのよ？」  
会いたいわって思ってたないし！  
出来れば平和に穏やかに寝たいわよ。

「！」  
私の発言に目を大きく開けて驚いた顔をする猿。

「…もしかして…何も聞いてねーのか？」

「？」  
「…だからか…！！ 道理で視界が悪いし、何故か追いかけてこが  
始まるわけだ！」

「…なるほど。だから私が呼ばれたのですね…」  
何なのよ？ 2人で納得しないでよ。

猿はソファーに向かうとソファーの床に沢山散らばっている本を左  
手で拾い始めた。

「確か小豆色の本だったよな…。コレは違う、コレは…あっ」  
猿が取った1つの本に見覚えがあった美人さんは猿の方に向かい本  
を受け取った。

「ああ…その本はドローの家にあったのですか…」  
「昨日言われたから探したんだぜ？」

「…っで、ついつい読みふけてソファーで熟睡ですか？そ  
れにしても扱いが悪いですね」

「崩れちまつたんだからしょうがねーだろが！」

「積み上げるのも程ほどにしてくださいね？」

再び崩れますよっと、忠告。

「うるせーよ！」

目当ての本では無いものをソファーの上に次々と置く。その作業を

全て左手でおこなう。それが3つ目の山になった頃、

「有った！渡してくれ」

発見した。その発見したものを美人さんに渡す。

「どうぞ、受け取ってください」

美人さんは私に差し出した。

「……」

その時、苦笑いの美人さんは小声で私に言った。

「あれでもドロ―は貴方を怖がらせてしまった事を反省してるんです。その証拠に近づこうとはしないでしょ？…許してやってください」

「……」

美人さんの言う通りに猿は初めに飛ばされた壁側に戻っていた。

美人さんの手から私に渡った本。それは小豆色の表紙で大きさは大学ノートぐらい。厚さは薄くて、七五三のアルバムに似ている。つかむしろそれっぽい？

あれって写真が1枚、2枚閉じてあるよね？ そんな感じの作り。

「中を見てください」

私は本を開いた。

「はあ?? 何コレ!??」

そこには私の写真が引き伸ばしたサイズで載ってたの。

高校の制服姿の私が、はにかんだ笑顔で写っていて、髪の毛は今より短く、しかも背景に桜が写っていたのよ。

…えええ?? 桜を背景つてもしかしてこの写真つて…入学式の時なの?!

何で入学式の時の写真がココに有るのよ!!

しかも写真の周りの用紙は花柄模様が描かれていて、見ただけで分かる凝った作り。

うっぎゃあー!!! 恥ずかしい〜!  
またしても羞恥プレイ!

2年前の自分なんか恥ずかしすぎるううう!  
しかも写真が写っているページに見覚えのある用紙が挿んであったの!!!

MY NAME IS MIO AIDA . I LIKE .....  
: MY SAKURAGA SUKIDESU .

英語の授業の初日に書かされた自己紹介文ーっ!!!  
単語も文章もメチャクチャで、途中からアルファベットを使った日本語になっていて奇怪な文章!  
散々笑われたものが何でココに?!

「...俺の所に送られたお見合い写真とプロフィールだ。名前くらいしか分からなかったけどな...」

「すみません。英語が苦手なんです。」

「...っか読んだの? 解読不能とまで呼ばれた自己紹介文を...」

「さ・い・や・く!」

「.....?」

あれ?

何か変な単語が聞こえたような...?

「何て言ったの?」

「はあ? ...名前くらいしか...」

「その前!」

「俺の所に送られて来たお見合い写真とプロフィール?」

!!!!

おおおおおみあい・しししゃんん???

「お見合い写真?!」

この写真が???

どういう事???

目が点になる私。

「つまり…‘夢つなぎ’を使って‘お見合い’をしてたんだよ  
それが証拠だと小豆色の私の恥しか載っていない本を指差す猿。

「え?」

お・み・あ・いいい??

私の掌から持っていた本が床の上に落ちるがそれどころじゃない。

「結婚期はまだ先ですが!!! 10代です私!!! 最近誕生日を  
むかえたばかりです!!!」

必要性を感じません!

何故!!!

何で夢の中でわざわざ見合いをするのよー!!!

「……あれ?」

そこで私は気づきたくない事に気付いちゃったの!!!  
もしかして…。

「お見合い相手ええ??!!」

この猿が私の相手?!

私は猿を指差した。

だって夢の中に出てきたのってこの猿よね?! しかも恥でしか  
ない写真を持っていたのも猿だし。

って事は…。

…まさかね?

しかし、猿は肯定したの。

「おう!」

と…。

猿の口の端が上がり、にかつと笑う。

否定してよおおお!!!

えーと…えーと。

他に夢に出てきたモノを思い出す私。

初めは真っ暗で分かんなかった。途中から明るくなって…。

他には…鳥もどきとか、象もどき…がいた！

「えーと鳥っぽいのか像っぽいのも…もしかして…」  
認めたくないんだけど…。

「見合い相手になるの…？」

ぼそぼそと呟く様にして問いかける。

その問いに美人さんと猿は大きく頷いた。

「そうだ」

「ええ。そうです」

いやあああああ！！！！！！

頭を抱える私。

知らない間にお見合いをしてた私。

しかも相手が動物ってどういうことなの？！

あれ？ 私って動物だった？？ 気が付かない間に尻尾が生えてたりする…？

ちらつと自分のお尻を確認。

良かった…生えてない。私ってばニンゲンダツタンダネ！

「…大丈夫ですか？」

私のであまりの混乱振りを見て、美人さんが私の顔を覗き込む。

「これって全部…本当？」

「ええ。本当の話です」

「どつきりとかじゃないの？」

「どつきりじゃありません」

「……」

哀れんだ目で見ないでください。

納得できないんです！

「あははははは」

「「！！」」

突然の私の笑いに驚く1人と1匹。だけどそんな事気にしてらんない！

そー言えば熱があつて寝てたのよね私。

だつて風邪引いてベッドで寝てたんだし。

起きたら知らない部屋にスツゴイ美人に赤い毛の猿。……ありえそ  
うだね。昔、起きたらパーティー会場だつたつて言う事があつたか  
ら…これはありか。

でも、訳の分からない‘夢つなぎ’を使つてお見合いはありえない  
よね？

猿とか像もどきとか鳥もどきとかがつ！

私の見合い相手。

人間じゃないのね。

おもしろーい

「凄く夢よね。」

ちよつと頭が痛いけど。

「…頭をうつた所為で壊れたか？」

「大丈夫でしょうか？」

ふふふ。幻聴げ・ん・ちよ・う 何も聞こえな〜い。

はい。現実逃避デス！！

現実逃避をしていると、美人さんが聞き逃せない情報を流す。

「因みにこのお見合い写真は5冊、作られております」  
と。

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

…思わず現実に帰つてきちゃったわよ！！

「言い難いのですが…2冊は返却されて私の手元にあります」

「へ？」

「わざわざ言うなよ…。それって2つの家からお断りがあったって事だろ？」

「真つ暗でよく分からない」と相手側は困っていた様子でした。

…ええですから、相手から断ってくださいますから大丈夫ですよ？」

「それって…『フラレル』って言うのと変わらなくねーか？」

「断るのが苦手でも大丈夫ですと言っているだけですよ？」

「……」

そう言つて笑つと私の頭を撫でる。

「それに、事故が起きたので次回からは私が間に入りますから安心して下さい」

「事故？」

「あー……」

猿が気まずそうに頭をポリポリかく。美人さんは猿の様子を気にも留めずに言う。

「事故防止とお見合いが成立するように仲介役として間に入って仕切らせて頂きます」

「仲介役？」

「仲人なこうどつて言つた方が分かりませんか？」

…結婚式でよく聞くような言葉デスヨネ。

## 現実10（後書き）

初め‘夢繋ぎ’と言う名だったけど、この名前で題名にして書いている方がいる事に気が付いたので平仮名に訂正しました。

本当なら別の名前を考えた方がいいので…名前を付けるのが苦手なので勘弁してください！思いつかなかった…です。

似たような話が有ったらどうしよう…と、思いつつ無い事を祈ります。有ったとしても偶然ですよ！ 偶然。

それ以上気にすると、話そのものが書けなくなりますのでお許しください。

では。

## 現実 11

「私とした事が…大変失礼を致しました」

何か気付いた美人さんが突然、私に謝ったの。

何で???

私の頭の中は？<sup>ハテナ</sup>マークだらけ。

「？」

「私の名はレイオ・ストライザーと申します」

突然の自己紹介。

…あ…。そー言えばしてなかったわね。忘れてたわよ。勝手に美人さん、や、猿、って名づけて心の中だけど好きに呼んでたし。必要性なんか全然感じなかったしね。

「ストライザー家の『変わり種の道標』<sup>みぢしるへ</sup>。蒼の称号を持つ図書館の館長をしております。今回の『花嫁さんいらっしやいな』まずは身内から策戦プロジェクト！！の仲介役に選ばれました。宜しく  
お願いいたします」

ニツコリと笑顔で言ったレイオさん。

色々ツツコミどころが満載なんだけど…。

「レイオさん？」

「はい」

「『変わり種の道標』とか『蒼の称号』とか『花嫁さんいらっしやいな』…、って何ですか？」

特に最後の『花嫁さんいらっしやいな』は何か嫌な予感がする！！

「『変わり種の道標』は私の持っている2つ名です。『蒼の称号』は個人が持っている力の種類<sup>ちから</sup>を表しています」  
2つ名は商品で言うキャッチコピーみたいなもの？  
力の種類を色で表すって…何の力よ？

説明が簡潔すぎて分からないんだけど…。これって私がアホって事？

そう思いつつも、レイオさんの説明を聞く。

「花嫁さんいらつしやいな　まずは身内から策戦プロジェクト  
！！」は今行われている見合いのことです」

そう言つて微笑んだ。

「…！」

あははははは。乾いた笑しか出ないわよ！　やっぱり〜て感じ。私  
が一番関わつてマスヨ。　つーかそのプロジェクト名つてどうなの  
よ？　微妙に名づけた人が気になるけどっ！

「…その説明はどうなんだよ？」

レイオさんの説明に溜息をもらす猿。

「…俺の名前はドロイド・フロカース。2つ名は有名な奴に付けら  
れる名前だよ。人によつては名誉つて思うやつもいる。俺は要らな  
かつたけどな。俺のは‘果てた渡り道’。朱の称号を持つ漁師。  
一応そのプロジェクトに関わつてる…宜しくな？」

えーと…2つ名があるつて事は2人とも有名つて事ですか？　つー  
か2つ名を言う時、嫌そうな声だったよね…よほど嫌なんだ…。

気が付くと2人の視線が私に集中。

もしかして…私の番だつたりするの？　ちよつと待つて！　えーと  
…。

「…相田　美緒です。北川高校の3年生です…何故かそのプロジ  
エクトに関わつてます」

それぐらいしか言う事無いよね〜？　普通に女子高生やつている私  
が‘2つ名’とか色とか持つてたら可笑しいし！！

「美緒様」

「ええええ？！　みみみつ美緒さまあ？　普通に美緒でいいです！  
！」

レイオさんは何故か私に‘様’を付けたの！　生きていて18年。  
様付けなんて呼ばれるような生活はしてない。普通の家庭に普通の  
学歴（英語は下の下だけど）にたいした特技無し。秀でた人間じゃ  
ない私。そんな私に‘様’付け？

…豚に真珠？ ネコに小判？

つーか…冗談抜きで‘様’は勘弁してえええ！！

「…分かりました。では美緒、お茶でも飲みませんか？」

「へ？」

真面目な顔して言うものだから一瞬、何を言われたか分からなかった。

「あつ…はい」

私が返事をする、レイオさんは迷う事無く、隣の部屋にあるだろうと思われる台所の方に向かった。

何かこの家の事詳しいよね？

そんな事を考えてると猿…じゃない、ドロイドさんに話しかけられたの。

「美緒。俺の事は‘ドロー’って呼べよ？」

と…。ドロー？ レイオさんも‘ドロー’って読んでたよね？ 何

で‘ドロー’なんだろう？

名前はドロイドよね？

「ドローさん？」

「…愛称に‘さん’はいらねーよ。」

「愛称？ 分かった！」

愛称ってあだ名みたいなものよね？ 確かにあだ名に‘さん’付けは変だわ。

和む私とドロー。

あれ？ もしかして良い雰囲気とか言うやつ？

いえいえいえいえいえ。お猿さんと結婚とかありえないですから！！

人は昔、猿だったって言うても無理ですから！！

「…言い難いんだけどな。この見合いは美緒が相手を決めるまで続くと思うんだ…」

「え???」

決めないとダメの？ 相手は人じゃないのに？

「適当に断っていけば良いとか思ってたか？ そんなに甘くねーよ。現に事故が起きても続行だ。しかもレイオの監視つき……面倒くせーな」

苦々しく呟くドロ。その後、真面目な顔して私に言う。

「断るのは最終手段にしとけ。後々ルールがあったりすると厄介だからな。切り札は最後まで握ってる。やるなら‘保留’か‘断らせ’にしといた方がいいぜ？」

「……」

何故こんなにもアドバイスをくれるんだろう？

「不思議そうな顔だな？ 罪滅ぼしみたいなものだから気にすんな。俺の自己満足だよ……悪かったな」

そう言うと、ぴょんと跳ねてカーテンを開けたの。

「！」

……え？

大きい窓から見えた外の景色は今までに見た事もないものだったの。私はこの時まで母の所為でよそ様の家に居るのかな？ って思ってたの。

昔、何度か母の企みによって、起きると知らない場所って言うのが良くあったのよ。サプライズが好きだから……無理やりにも寝かせて運び出す事があった。起きたらパーティー会場とか旅館とか。それは全て日本でのこと。

でも……。

「……」

「今聞くのかよ……！！ ……遅いだろ……」

素晴らしいつつこみで。

だってどう見ても日本の景色じゃないのよ？

エメラルドグリーン色の海に防波堤の無い岸。今時あるの？ って思う板で出来た船。……浮かぶようには見えないんだけど。

それよりも驚くのが、家の周りには見た事がない色をした薔薇の花

が咲いてたの。空の色や金色に輝く薔薇。  
何コレ？

海の近くに薔薇って咲かないよね？

しかも巨大。空色の薔薇は人の顔ぐらいの大きさだったの！！！！

「どうしたんですか？」

お茶を入れたレイオさんが戻ってきた。私とドローの前にお茶を置く。

「ありがとうございます」

温かくてイイ匂い。一口飲むとホツとして、胸の辺りがぼかぼかと温かくなる。

「ああ…。今頃になって、ここどこよ？」って驚くから…」

あの…。今まで驚かなかった私が変わって言う顔しないでほしいんだけど。

流石に起きた時は、どこ？’って思ったわよ？ その後のハッピーでそれどころじゃなかったんだから。しょーがなくなる？

まあ、起きたら知らない所に居る経験が多いから…後で分かるでしょうって、考えてたし。

「…そう言えば、言ってますでしたね。ここは、ハッピーランドです」

「で、俺の家」

「…！！」

「ハッピーランド、凄い名前！！」

「…かそんな名前の国あったっけ？」

「え？…日本だよな？」

日本にあるアトラクション系の…やつじゃないの？

「いえ…」

ま・さ・か！

その時私は閃いた。もしくは悟った。  
もしかして…もしかするわけ？

銀色の髪の毛。キスだけで自動翻訳。喋る猿。‘夢つなぎ’と言う  
変な夢世界。しかも外には不可能と言われている色の巨大薔薇。  
現実的にありえないくない？？

まさにファンタジー！！

もう、アレしかないよね？ よく小説であるアレ。

そう考えると自分の部屋で寝ていた私が起きると知らない部屋に居  
たつて言うのもうなずけるし！

心当たりは夢の中で猿バージョンのドロウに？まれた時に起こった  
異変。

異・世・界・トリップ！

そう考えるとつじつまが合うのよ！ 不思議な事に。見た事無い髪  
の色は異世界なら当たり前になるし。自動翻訳とか夢つなぎとかは  
魔法っていう感じじゃない？

喋る猿も居るのが普通になるわよね？

でも…異世界って事は…私は帰れるのかな？

…何か気付いた所為で落ち込んできた…。

「…ココって異世界よね？ 私帰れる？」

だから私がそう聞いても不思議じゃないよね？

「はあ？」

「え？ 異世界ですか？」

しかし、2人の反応は目を大きく開けるといいう一般的な驚いた顔。  
しかも疑問系。

…何で？

「え？ …ココって異世界じゃないの？ 異世界トリップして私は  
ココにいるんじゃないの？」





「そこに咲いてる花は何？」

「…クソ兄貴が勝手に品種改良して植えて行ったもの…臭いから窓は開けるなよ？」

「レイオさんの魔法みたいな力は？」ちから

「突然変異。俺もビツクリしたんだぜ？」

「…私の力は魔法みたいですか？」

そう言つて、世界地図を振ると元の雑誌のイラストに戻すレイオさん。

「…魔法じゃないの…お？」

どう見ても魔法にしか見えないんだけど…？

「あれえ…？」

目の前が…暗い…？？

そんな事を思っていたら突然、ブラックアウトした私。

「…っ！…！！」

驚くレイオさんとドロー。

そー言えば私、熱あつたんだよね…。

興奮して暴れたらそら気絶するよね…？？

## 現実11（後書き）

説明するのって想像以上に大変ですね。主人公だけの視点だと穴だらけで、分かり辛いので、別の方の視点も書きます。

## 現実 12

暗い闇。

どこを見ても真つ暗な闇の世界。

不思議と恐怖を感じる事がない暗闇。

ああ…いつもの夢の中。

いつも見ているから直ぐに分かったの。

そー言えば、話の途中で私は寝ちゃったんだっけ？

…確か‘夢つなぎ’だっけ？ って事は誰か現れるって事??

そう思ってるその後から肩を叩かれたの。ほんほんと、軽くだけど。

「へっ?」

今までドロー以外で捕まる事が無かった私がこの世界の中で直ぐに触られた事に驚いた。

叩かれた方を見ると頬に何かが刺さる。

「え???」

ええええええええええ!!???

見覚えのあるウェーブのかかった髪の毛に、宝石のような輝く瞳。

歳を忘れたんだろうなあ…と言いたくなる年齢不詳の肌。そしてフリフリのレースがついた洋服を違和感なく着こなしていた。

それは、母だったの!

母の人差し指が私の頬に刺さった状態を見て、満足げな顔をして見る母の姿に…力が抜けそうになった。

とりあえず、動物もどきでなくて良かったと言っべき?

「うふふ。美緒ちゃん」

「えーと…母?」

本当にこれは母?

いつも現れるのは動物もどきなので、疑う私。

「もう！『母』じゃなくて、『ママ』よ？」

あー…正しく母だ。

小学生の頃、母のことを『ママ』と呼んで同級生に馬鹿にされて以来、私は『母』と呼んでいるの。普通なら『お母さん』とかになるんだけど…当時の私は『マ』を『は』に変えただけって言う意識しかなかったの。

『は』なら馬鹿にされないし…で、今でもその癖が抜けずに『母』と呼んでいる。

すると、母は『ママ』と呼ばれたいらしく、私が『母』と呼ぶと毎回、訂正が入るの。それを8年間言い続けているのである意味合言葉。

「宅配便を受け取って美緒ちゃんの部屋に戻ったら、居ないんだもの。驚いたわよ？」

って事は…。

座薬を免れたって事!?

バンザイ私!! いやいやそうじゃなくて、そうでもあるけど!

先程までの事は現実で、その証拠に私は部屋から居なかったって事になるよね?

「レイオから連絡あって良かったわ。夢を使っただけの行き来は不慣れな者がやったら危ないのよ?」

ちよっ! 母と知り合いだったわけ??

ビックリする私。

「さあ、帰るわよ」

「…えーと慣れてるの?」

さっき危ないって言ったよね?

っ! か私は夢を使って行き来したって事? あーもしかして、ドロ

ーが掴んだ時に起きたアレ?

「プロよ」

「はあ?!」

まじかいつ!!!!

……母は何でも有り。何でも有り。うん。疑問に思ったら負け!

「しかもココの空間は、夢つなぎ、よ。道が初めから出来てるんだもの失敗はしないわ」

「何でそんなに詳しいのよ!!!」

‘夢つなぎ’って言葉を何で母が知ってるのよ!? しかも道が出来てるって……。

私の言葉に不思議そうな顔をする母。

「製作者はママよ? 当時10歳だったかしら」

そう言つて首をかしげる母。

はああああ???

母が作つたの?

えええ?

「こんなのあつたら面白いわよね〜て、思いながら色々弄つて試してみたら出来たのよね〜」

そんな簡単に出来るもの?

「……………」

……母は何でも有りだったわ……。

常識に囚われたら母と付き合えない。頭が可笑しくなる。それが母という人物。

疑問に思つちやダメ。

何でも有り、何でも有り……っ!!!

何度も私は心の中で唱えたの!

「……………」

しばらくして、猛烈にレイオさんとドローに今すぐ謝りたい衝動に駆られた私。

一番の非現実者がここに居たわよ!! 母の存在自体がファンタジ

……………!!



## 現実12（後書き）

はい、これであらすじ部分になります。

一応：第一章「夢の中でのお見合いを理解していない編」終了って事で次回から番外編を含みつつ、第二章「夢の中でお見合いはどうなるの？」編（仮）」になります。

ココまで読んで下さいますとありがとうございます。引き続き、堪能してくださいませ幸いです。

別の現実〜ドROID〜（前書き）

ドROID視点です。

## 別の現実〜ドロイド〜

俺の住んでいる国は変わってる。

海に囲まれた小さな島国で、そこに棲む人々は俺が言うのもなんだけど一般的なものとは程遠いと思う。

幼い頃はそれが当たり前だった。疑問にすら思わなかったが世界を知る事で自分達がいかに不思議な生き物だと言う事を知った。

俺の名前はドロイド・フロカーズ。

俺は実家を出て1人暮らしをしている。因みに仕事は漁師。

漁師の仕事は船に乗って海に出て魚を獲る。だが、今日の天候は大雨。しかも風が強い。その影響で波は荒れている。たださえ1人用の小船でこの海の中を出るのは素人でも分かる程の危険。その為仕事は休みだ。お気に入りのソファアに座ってテレビを見ていたら電話がかかってきた。

『やあ！ 麗しの弟よ！！ 薔薇より華麗で宝石よりも輝いてる素敵な素敵な素敵なお兄様だよ！！』

受話器から思わず耳を塞ぎたくなるようなハイテンションな声が聞こえた。

「切って良いか？」

電話の相手は俺のクソ兄貴からだった。他人から言わせると、腰が抜けるほどの甘い声、らしい。身内の俺から言わせれば迷惑な声だ。しかも余計な言葉が多すぎて会話するのが非常に疲れる。

うぜえええっ！！！！

『はっはっは！ 面白い冗談だね？ この麗しくって可憐な声を聞きたく…』

冗談じゃねーから。

ヤローの声聞いて麗しいなんて思うわけがない。

「用件を言え」

はつきり言っただけ。

会話をするのも疲れる。

『もう、せつかちだなベイベー！ 今日素敵な贈り物が届くから受け取るんだぞ！』

「いらねえ！！」

思わず叫んだ。

実家から出て、一人暮らしをしている所為か時々兄貴からの贈り物が届く。この部屋の窓から見える巨大な金色や青色の色をした薔薇は兄貴からの贈り物だったりする。

… 男の一人暮らしに薔薇を贈るのは嫌がらせかよっ！！！！

と、当時は思った。だが、本人は俺が喜ぶと思っただけで送ったことを後で知った。

… アホだ。

しかもこれ、でかい上に臭い。

受け取った瞬間、あまりの臭さに俺は近くの窓から投げ捨てた。それで終わりだったはずなんだが…。

数日後、害虫すらも殺す臭いを放つ薔薇は兄貴の手で植えられた。

「流石だね僕の弟。部屋に飾るよりも庭に植えたほうがいいね！… だけど、植え方が甘かったから直しといたよ」

と言っただけ。

よけいなお世話じゃあああああっ！！！！

以来この窓は二度と開く事は無い。開かずの窓。

『何を遠慮するんだ？』

遠慮してねえー！！！！

ぼんっ！

小さな音がすると、目の前に黒い封筒が現れた。床に落ちる前に、受話器を持っていない方の手で慌てて掴んだ。送られた贈り物。

言葉が通じない身内は本当に嫌だ…。

「…」

どうやって送られたかという超能力と言われるもの。ひいたな？

言っとくけどこの国ではそれは当たり前だからな。

子供から年寄りまで当たり前のように使っている力。

スプーン曲げとか透視をする手品のような力。だが、種も仕掛けもない。

「黒？？」

手元の封筒を見ると封筒の色は黒だった。

『喜ぶがいい！！ シュフアーナ家からの郵便物だぞ』

「はあああああ？？」

シュフアーナ家はこの国を守る役目を持つ一族。その中で一番の力の持ち主を‘国主’と呼んでいる。分かりやすく言うなら王様と思えばいい。

王族の家からの手紙。

何でそんな所から郵便物が届くんだ？

「偽物じゃねーよな？」

『はっはっは。素晴らしい冗談だね。流石、麗しい僕の弟だね！ 神々しい黒の色はシュフアーナ家の証！！ ああ！！ なんて言う美しさだ！ 送り屋の仕事をして、初めて送ったよ！！』

興奮気味の兄。

兄の仕事は代々続く‘送り屋’と言う仕事。頼まれたモノを相手に送る宅配家業である。

力を使って相手にモノを送るので交通手段の難しい所にも届ける事が出来る。その代わり、事故防止に電話をして相手の確認をしてから送る決まりになっているが。

「あれ？」

俺は封筒の中身を確認しようとして気付いた。封筒は既に何度か開けた跡がある事に。

「…中身見たのか？」

『勿論だとも！！！！』

「おいっ！！」

業務違反だろうそれは！！！！

呆れつつも、中身を取り出すと小豆色の本だった。

「？」

本をめくると幼い顔のはにかんだ顔で写っている少女の写真。

「…写真？」

『喜ぶがいい！ お見合い写真だ！』

「はあああ??？」

何でそんなものが？

しかもあのシユフアーナ家からだと言っ。

意味がわかんねえよ！！！！

「…順番的に兄貴が先じゃねーの？」

結婚してないのは兄貴も同じ。しかも長男。

『………した』

突然、兄貴の声が低くなった。

「？ 何か問題でもあったのか？」

兄貴のテンションを落とすとは…どんな奴だよ？

『暗いし暗いし暗いし暗いしく・ら・い・しっ！！！！ 何も見えないしっ！！ 僕の麗しい姿を暗闇にさらすとは何て罪深いんだ！』

！ 僕は2度目は嫌だね！』

「………」

そう言えば…兄貴は暗所恐怖症。

兄貴がお見合いしたが、そこは暗闇の中だったって事だよな？

で、兄貴が嫌になっただので俺に回ったと言う事か？

『じゃあ、宜しく！ 可愛い弟よ。詳しくは華麗な銀の天使様に聞いてくれ！』

がっちゃん！

そう言うと通話が切れた。

「自由人だよな…」

嫌なものは俺に押し付ける。しかも説明不十分。

俺は溜息をつきながら幼馴染に電話をした。

\*\*\*\*\*

「レイオ…今、電話大丈夫か？」

『ええ…大丈夫です。何かありましたか？』

レイオは俺の幼馴染で歳は俺の1つ上。外見が性別を感じない整った顔立ちをしていて、銀色の髪の毛をしている所から兄貴に「銀色の天使様」と呼ばれている。本人は嫌そうだが。

「クソ兄貴から黒い封筒が届いたんだけど知ってるか？」

『ああ…。知ってますよ。その責任者をやっております』

「へ？」

何でだ…？

「…クソ忙しいのに？」

何気にコイツは図書館の館長をやりつつ教師じみた事や医者のような事までやっている多忙な奴だ。

『楽しそうだったの。…説明しますと、その写真を受け取った方は写真の少女と夢の中でお見合いをします』

「夢の中？」

『ええ。‘夢つなぎ’です。お見合い写真が通行書になってますので半径1メートル以内にそれを置いて寝てください。少女とのタイミングが合えば自動的に繋がります…』

‘夢つなぎ’を使用して何か大掛かりだな…。

あれって使える奴が少ない上、手間がかかるっていう話だよな？

「何で夢の中でお見合いなんだ？」

『相手の少女が異国に住んでいるんですよ。どちらかがお見合いの度に行ったり来たりすると、色々面倒な手間がかかるでしょう？』

「……‘夢つなぎ’を使う時点で色々な手間がかかってるんじゃないかねーか？」

『専門家が必要なだけです』

さらりと言った一言に俺は悟った。‘夢つなぎ’でかかる手間は他人に押し付けたという事を。

「……」  
『専門家哀れ。』

通行書を作ったり空間を作ったりと色々多忙に違いない。

受話器を握り締めながら思わず遠くを見る。

『‘夢つなぎ’は写真それを近くに置いて寝るだけです。パスポートの手続きも休暇の届出もお金も必要ありません！ 楽ですよ』

…確かに。

お見合いは結婚する為のものだ。だからこそ見合いをする人間は仕事があつたりして、簡単に長期の休暇は取れない。まして1人暮らしの俺には余計な出費はキツイ。

「……」

だが、この見合い…何かあるって考えた方がいいな。

コイツが責任者だぞ？

多忙だろうが‘楽しそう’って言う理由で引き受ける奴が何もルー

ル無しとは考えられない。

『ある方の情報では可愛らしい方だと聞いてますよ？ 因みにそれを受け取った方は必ず1度はお会いする決まりになってます』

「…」

思わず写真を見る。

強制かよコレ…。

‘夢つなぎ’がなかったら色々大変な事になってたんじゃないか？

「…早めに会った方がいいのか？」

面倒くせーなあ。

『次がありますので早めにお願ひします。少女との縁が無いような場合は自動でその写真は手元から消え、次の方のもとに届きますから』

バトンかよ！！

そう思つてると受話器の方から何かかぶつかるような音が聞こえた。

『ガタガタンツ！！』

「っ！ どうした？」

『ああ…。気にする事ではありません。棚の奥にあった本を取ろうとして邪魔のものをどかしただけですから』

「…」

きつと投げたんだろうな…。

こいつは見た目と違って、思いつきがいいと言つか豪快と言つか…。

『検索用の力具かくでも作った方がいいですね…』

ブツブツ呟く声でした。

今、電話中だつて事忘れてねーか？

…それでも俺が質問したら直ぐに対応出来るんだからすげーよな。

「検索用？ …何の本探してるんだ？」

『‘星と空と海’と言うタイトルの本です。明日使つんですよ』

「…そっか。説明ありがとうな」

そう言っつて俺は切った。

「……………」

「星と空と海」どこかで見た覚えがあるのは何でだ？

「…俺の家に有ったり…しねえーよなあ？」

悲しい事に無いとは言いい切れない。

念のため、俺は本棚辺りを探す事に決めた。

## 別の現実〜ドROID〜（後書き）

本年も宜しくお願いします。今年初更新です。

ドローさんの言葉が方言になりそうですやばいー！  
語尾に「け」をつけそうになる…。

「ねーんけ？」 無いかい？

「そっけ」 そうなんだ

と、言う具合に…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0576/>

---

夢見合い

2011年1月22日12時30分発行